社会教育職員が、社会教育職員のために作った本

「初めての公民館」ができるまで　　ｐａｒｔ１

SaLESのスタート

９５年の春。「私と一緒に本を出しませんか。」神奈川県公民館連絡協議会の神崎会長から、そんなお手紙をいただいた。

当時、私が在籍していた六会公民館の女性セミナーの記録冊子を神崎会長が読んでくださったことがきっかけとなり、私的に勉強会をして、その成果をまとめてみないか、と誘ってくださったのだ。

財政上やその他の事情から、派遣される公的な研修では、宿泊もできなくなっており、同じ仕事をする他市の仲間とゆっくり話す機会が減ってきていたので、生きた情報を手に入れる絶好の機会！と、喜んで参加することにした。

同年８月５日、第一回の学習会。会場である川崎市の「中小企業・婦人会館」に、地図を頼りに行くと、そこには、見知らぬ顔ぶれが集まっていた。神崎会長が行政、機関の職員と市がいくつかになるように、バランスを考えて声をかけてくださったメンバーで、当時神奈川県の生涯学習課課長代理であった山田さん、川崎市の社会教育課や青少年教育の職員、図書館職員、教育事務所の社会教育主事、座間市の公民館職員である植松さん、相模原市の社会教育課職員の藤田さん、そして藤沢市の公民館職員であった私と、神崎会長で９名。

さらに、アドバイザーとして、元大正大学教授の湯上二郎先生が無償で参加してくださるという贅沢な学習会であった。

会の名称は、Ｓａｔｕｒｄａｙ　Ｌｉｆｅｌｏｎｇ　Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ　Ｓｔｕｄｙｓの頭文字をとって「ＳａＬＥＳ＝セイルズ」メンバーの話し合いでつけられたものだ。

講義を聴く研修も大切だが、神奈川の社会教育職員で互いの知識や経験を共有しあい、学び合い、何か発信していこう、ということを確認しあって、学習会はスタートした。

まず、湯上先生から次の課題提起がされた。

生涯学習という考え方の中で、

①教育そのものを考えていく必要がある。教育が問われている。

②最大の原因は教育方法論（スキルとしての）が掘り下げられていない。

③社会教育の中での方法論（専門性といわれるところの）職員論が出てこない。

④弱いのは、ミクロの理論とマクロの理論が別々に研究され、双方をつなぐ研究がされていないこと。

⑤社会教育の方法を理論化していくこと。

社会教育の特徴を一般理論，基礎理論として捉え、公民館主事について、資格と研修成果と体系を考えていくことが必要である。

これを受けて、私たちの３年半に及ぶ長い自主研修が始まったのである。

社会教育主事の専門性とは…抱えてきた課題

社会教育法の中で、社会教育主事の整備に関する指針はあっても、整備されていない市町村教育委員会の実態。その中で、資格を持つこと、発令されることの意味、そして実際に仕事をして行く中で問われる専門性。

公民館で仕事をしながら、常に自分の中で課題として抱えてきたものだった。

私自身、社会教育主事講習では社会教育のマクロ理論を学習したが、ミクロ理論は、地域の人たちと実際に学習を創る中で、相互学習の必要性や手法を学んできたのであり、これを体系的に学習するシステムはない。そんな中で、公民館職員は一般行政職が人事異動で着任し、派遣研修で社会教育主事の資格は得ても、スキルを身に着ける前にまた、一般行政職へと異動していく。

社会教育を構造化、高度化することの重要性を言われても、それを企画運営する職員の専門性の必要性が叫ばれても、実態はその実現を難しくしている。

それでは、社会教育主事の専門性は何か。どんなことを身につけていることが必要なのか。ともすると個人の資質だけであるかのように語られてしまう、あるいは、資格の有無だけの問題に考えられてしまう、この「専門性」について、メンバーがそれぞれの仕事での体験や、その中で得た考え方を意見交換し、神崎会長の作られた、社会教育職員の専門性をイニシャルにして並べたＣＨＡＰＯ理論を、検証し、学び、悩み、修正を加えていただく形で話し合いを重ねた。

湯上先生から、「医療システムに社会教育を当てはめると。公民館主事は何になる？」というテーマを出された時もあった。

私も含めて公民館職員からの意見は「町医者」であった。

話しを聞き、診察をし、必要に応じて自分でレントゲンも撮り、薬を調合し、場合によっては大病院に紹介をする。往診をすることもある「町の開業医」

公民館職員も、地域の人と話しをし、学習の企画運営をし、ＡＶ機器の操作もし、資料も作り、時には、他機関や、民間教育産業や、専門的な講座の紹介もする。

相手によっては、話しを聞いてあげるだけでも解決になってしまうあたりも、町医者に共通するのではないだろうか。

それでは、公民館職員が町医者なら社会教育主事はなんだろう。「社会教育を行うものに指導助言をする。」と法律では定義づけられているが、指導助言をするためには、「社会教育を行うもの」が何をどうすればいいのか、社会教育を行ううえでの専門性はなにかがわからなければならない。それが解って初めて、必要な指導，助言の内容が見えてくるのではないか。

そこで、まずは「社会教育を行うもの」の専門性を、観念論でなく、ケーススタディをしながら、見つけていくことを糸口とすることとなった。

社会教育職員が、社会教育職員のために作った本

「初めての公民館」ができるまで　　ｐａｒｔ２

手探りの積み重ねで実践と理論をつなぐ

社会教育主事の専門性のマクロ理論、ミクロ理論、そしてその間をつなぐものをみんなで学習しまとめようと、神奈川県の社会教育職員の有志で始めた学習会、ＳａＬＥＳは、学習の時間はもちろんのこと、集合時間にメンバーが揃うまでの有意義なる雑談の中でも、互いの市の情報を交換しあい、憤ったり励まし合ったりしつつ２年目を迎えた。

「社会教育をおこなうもの」の専門性を考えるひとつの方法として、国、県の研修だけではなく、市ではどのような研修が社会教育職員にむけて行われているか、それはどのような能力を育成するためのものなのか。藤沢市、相模原市そして座間市において、実施されている社会教育職員の研修プログラムを持ち寄り検証する作業を行った。

そこでは、社会教育に関する理論や学習の展開方法はもちろんだが、職員同士が自分たちで開催した講座についてグループ討議をしたり、講座の模擬プログラムを作る中で先輩職員のノウハウを学ぶ、といった市レベルならではの研修内容がある。その中から、職員が身に着けられるものを考えてみた。

次に、「介護教室」をひとつの例にして、この講座が藤沢市と座間市では公民館職員のどのような問題意識から始まり、どう発展してきたかを比較検討し、ひとつの課題を講座に組み立て、運営して行く中で公民館職員に必要とされるものを拾い出してみた。

これらの中に見える専門性を神崎会長のＣＨＡＰＯ理論とつないでいく、といった積み重ねを１年間ほど続けた。

学説の中で言われている「専門性」をケーススタディし、実践とつないでいく作業の中で、少しずつではあるが、メンバーの考える「社会教育を行うものの専門性」が共有されてきた。しかし、それを言葉、文字、あるいは図解しようとすると、微妙なずれが拡大してしまう。

行きつ戻りつ手探りしながら進む、まさにそんな学習の積み重ねであった。

それでも、私自身が公民館で学習課題をプログラム化していく過程で考えてきたこと、地域の人たちと一緒に学習を作る中で得たもの、学習者の力の生かし方などが、仲間との話し合いの中で整理されていくことは、公民館の実践の場で次の学習を組み立てていくことにも役立ち、何とも得した気分であった。自分の実践を理論とつなげ、学んだことを実践に移す。まさに生きた学習時間であり、プログラムが用意され講義を聴く研修よりも、ずっと有意義なものであった。

学習を続ける難しさ＝メンバーの減少と湯上先生の不在

月に一回土曜日の午後に仕事の合間を縫ってこの会に参加するのは、とても大変なことである。職場の異動や仕事の都合から、メンバーがだんだん減少してしまい、97 年

４月を過ぎると、植松さん、藤田さん、山田さん、神崎会長、そして私の５人になってしまった。

しかも、湯上先生が、「ここから先は、あなたたちでおやりなさい。」とおっしゃって、学習会にいらっしゃらなくなってしまった。

湯上先生は毎回の学習会の中で、決して答えになることをおっしゃらないのだけれど、話し合いが混沌としてくると、適切なサジェスチョンをして、軌道修正と問題提起をしてくださっていたので、先生がいらっしゃらない学習会は、とても心細かった。

残った５人は、何度も以前のノートをひっくり返して確認のしなおしをしたのだが、、前月には共通認識して整理されたはずのことが、次の月に確認するとそれぞれ違う認識をしていることがわかり、また、頭を抱えるなどということも何回もあった。

湯上先生にいただいた「ニーズ発生のメカニズム」というプリントから、自治能力をもった市民の育成を公民館の目的として考えたときの、潜在的要求と顕在化した要求、個人と社会といったものを、どう整理していくかを解こうとしていた時などは、特にそうだった。

話し合っている間にはわかったような気がしたことを、もう一度自分で問い直し、仲間と何度も何度も確認し、共通した図（「初めての公民館」Ｐ３３とＰ５７に掲載）に整理されたときには、本当にうれしかったものだ。

メンバーが集まらず、私ひとり公民館の部屋で２時間も過ごしていたこともあった。

しかし、グループで学習を長く続けることの難しさを実感しつつも、嫌だとは、少しも思わなかった。

椅子に座っていることももどかしく、ホワイトボードの前に立ったままで、それぞれ書き込みながら自分の考えを話し、認識を共通にしていく過程などは、小人数ならではの実り多い学習であったし、自分で答えを見つける学習の楽しさを満喫していたからなのだろう。

何よりもメンバーそれぞれが、自分の職務の中での実践を形に残し、少しでも後に続く職員の役に立ちたい、わずかな着任期間でも、よりよい社会教育を市民と創っていくために神奈川から発信していこう、という想いをエネルギーにしていたからこそ、続けていたのだとも思う。

神崎会長が整理していらしたことを何度も問い直してしまう私に、「秦野さんは厳しいなあ。」と言われることもしばしばあった。

思えばずっと目上の方に対して失礼なことであったが、わかったふりをしてしまうことは、一緒に学習することにはならないのではと思い、納得するまで議論させていただいた。会長も（内心はどうであったかいささか心配だけれど）社会教育はそうでなければ、と、それを認めてくださっていたので、年齢も立場もちがうメンバーが、存分に意見交換できていた。これも長続きのポイントだったかもしれない。

社会教育職員が、社会教育職員のために作った本

「初めての公民館」ができるまで　　ｐａｒｔ３

レポートにまとめる

「３年たったし、そろそろレポートにまとめよう。」という神崎会長の提案を受けて、これまでの話し合いを分担しながらレポート化することになったのは、９７年の暮れで98年5月を第一回目の原稿締め切りに設定した。

さて、レポートといっても、3年もの学習記録とそれぞれの現場での実践、お互いに提供しあった資料をまとめてのものであるから、質、量ともに膨大である。

誰がどこを書くといいかも含めて、神崎会長が構成や柱立てを考えてくださり、それを少しづつ修正し、分担し書き始めた。

そのレポートを毎回持ち寄り、読み合い、その人だけの意見になっていないか、これまで話し合われたこと、確認しあったことと違う内容になっていないか、表現がわかりにくくないかなど、意見交換するのである。

自分の分をまとめるという作業だけでもかなり大変なのに、人の書いたものを読み、自分のものとして確認していくのだから、時間的にはもちろん、内容としても大変なものである。しかしこれが、お互いにとても勉強になったとも思う。

他のメンバーが書いてきたレポートと記録ノートを照らし合わせ、意見を改めて交換しながら進めるので、とても時間がかかり、一生懸命学習会に間に合わせようと書きなおしていったレポートを読んでもらえない回もあった。

せっかく書いてきたのだから、と、メンバーが書いてきたものに対して意見を言わないことが、相手を大切にすることにはならない。一人づつの論文集ではなく、ひとつの本となりえるようにするのだからなおさらである。

３年も話し合いを続けてきたメンバーだからなのか、誰もが意見を言われても冷静に受け止め、よりいいものを書いてくる。

信頼関係ができあがっていたこともあるし、大人の相互学習ならではの互いを高め合う学習になっていたからだと思う。

本になるまで

いよいよ、全体がまとまり、湯上先生にも読んでいただき、それぞれが書きなおしや、書き足しの宿題をもらい修正し、９８年秋、概ねレポート集が書きあがった。

だが、とおして読んでみての私の感想は「こんな難しいもの誰が読むの？」であった。

「大学の先生がこれを使って講義をするのならともかく、私たちが読んでほしい相手である新任の公民館職員は、この本を読みたいと思わないし、いきなり理解できないのでは。」と、学習会で言ってみると、メンバーそれぞれが似たように思っていたことがわかった。

さて、どうしようというとき、パソコンの入門書のような構成にしたら、と、植松さんから意見が出された。

ひととおりの基礎知識、活用方法を最初の部分にまとめ、それをより詳しく知るのは先のページを読むというようにしたらどうかというものだった。

急遽、２部構成にすることが決まり、さっそく次の月までの宿題となった。

ひとつの項目を見開き２ページにするはずであったのだが、「これだけは言っておきたい、こんな資料はつけておきたい」と、ついつい書きすぎてしまい、約束をはるかに超えるページ数になってしまった。しかし、植松さんと藤田さんがレイアウトを工夫することで、分量の多さをカバーしてより見やすいものにしてくださった。

タイトルも、当初「社会教育を行うものの職務と職務の水準」であったが、それは副題に回して、初めて着任した人のために、初めて社会教育職員が創った、公民館職員のための入門書と専門書をまとめたもの、という意味で「初めての公民館」とした。

それぞれがさまざまな機種のワープロやパソコンで作成し、１００ページもの量になったレポートのフロッピーをひとつに整理するという大変な作業ののち、パソコンからプリントアウトするそばから付箋をつけて校正する作業を経て、原稿ができあがった。

印刷は、みんなでやろうと言っていたのだが、植松さんが印刷屋さんを夜借りて、学生バイトと一緒に印刷製本までしてくださり、初版２００冊は、９９年３月に完成したのだった。

SaLESで学んだもの

社会教育を行ううえで、やはり、理論は必要である。

それは、学問としての社会教育論だけではない。ひとくちに専門性といわれる「社会教育を行うものが身につけるべきもの」が何なのかを体系的に理論づけるものも必要なのだと思う。そして、個人の資質に頼られていた部分もある、プログラミングや学習運営の手腕についても、研修によって身につけ得るものとした理論も必要であろう。

私たちのレポートはそれを目指しながらも、まだまだそれらを網羅しているものとはいえないことは十分承知している。しかし、必要といわれながら形になっていなかったものを相互学習の過程で作り上げ、形にしたことの意義と、想いを意見にし、整理して理論化していくことの楽しさと、相互学習だからこそそれができるということを、私は改めてＳａＬＥＳの学習会の中で学び、そのことを皆さんにも伝えたいと思っている。

そして、今、これを土台にして、次なる課題「社会教育主事の専門性」を学習し始めている。またまた、長い道のりに足を踏み入れてしまったのだ。

私たちへのエールと叱咤のため、「初めての公民館」をぜひ読んで、ご意見をいただければ、と願っている。

藤沢市教育委員会生涯学習課　社会教育主事　秦野　玲子

大判「社会教育」　2000 年　1 月号～3 月号にて掲載